

「使える外国語」の

習得を目標に、94年に設立された甲南大国際言語文化センターが今年、15周年を迎えた。

「2010年版『週刊朝日進学MOOK』大学ランキング」の外国語に対する学生の満足度で、関西の大学ではトップとなる全国10位に入るなど、着実に成果を上げている。

日本の大学の語学教育は従来、各学部がそれぞれ行うか、文学部が担当するケースがほとんどで、内容は読み書きが中心だった。

センターはこうしたやり方を改革しようとして新設したもので、大学

甲南大国際言語文化センター15周年

学部の壁超え学習サポート

全体の外国語教育に責任を持つ独立した機関と位置付け、「聞く・話す」も含めたバランスの取れた指導を目指



1人1台のパソコンが備わった教室で語学を学習する甲南大の学生たち

現在の開講しているのは英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語の5言語。学生は英語のほかもう1言語を履修する。

特に力を入れてきたのが、学生とのコミュニケーションを重視した双方向型の授業だ。

中国アモイ出身の胡金定センター所長は「一人一人の発表の機会を増やすなど工夫を凝ら



胡金定所長

した結果、学生は楽しみながら積極的に参加するようになった」と話す。授業のスキルを磨くため、多くの教員に「教授法」を専攻させている。

中・上級レベルの授業を増やし、4年間いつでも外国語を学べる環境を提供していることも大きな特徴だ。1年生の基礎レベルは必修科目だが、2年生以上の中・上級レベルは選択科目であるにもか

かわらず、全体の約60%が受講している。国際社会や言語が話

される国や地域への理解を深めることにも重点を置く。甲南大のほか他大学の留学生も引き、現地事情を聞いたりして交流する「チューター制度」もその一つだ。

外国語だけを使用する2泊3日の合宿や、センターの専任教員が学習や留学、進路などについて相談に乗る「外国語学習相談アワー」など、学生のサポート体制も整えている。

効率的に外国語学習ができるようハード面も充実させている。1

人1台の学生用コンピュータを備えた教室や、大型液晶プロジェクターが設置された教室など、最新の設備がそろそろ。

こうした取り組みが実り、卒業して国連職員になったり、中国で起業して経営者になるなど、世界を舞台に活躍する人材も輩出するようになってきた。

胡所長は「グローバル化の進展で、実践的な外国語と異文化を理解する広い視野を身に着けた人材が求められている。時代に応じた外国語教育を実施したい」と抱負を語る。

【近藤伸二、写真も】